

■社会基盤整備特集■

平錦建設株式会社(姫路市)



中山 花菜さん

姫路市の臨海部で産業廃棄物焼却炉の建設が進んでいる。その現場で測量機器をのぞきながら、鉄骨を立てるための中心線の位置を決める「墨だし」の作業を行っているのが、入社2年目になる平錦建設建設部の中山花菜さんだ。墨だし以外にも、工事に使われる鋼材が正しく入っているかを確かめ、工事が図面通りに進んでいるか確認する検収作業を担う。この建設現場は8月から担当しており、来年3月の完成までを現場監督として見届ける。

建設の世界に進もうと

美術館の設計を夢見て



建設現場で「墨だし」の作業をする中山花菜さん

現在の現場では、焼却施設の正門の付け替え工事についても施工図作成を担当するなど、好きな設計の仕事も任せられている。「もともとあった門の基礎を生かしながら新しい門をどう取り付けるか。机の上だけでは分からない問題も出てきて、勝手が違います。現場で壁にぶつかりながら学ぶ日々だ。

現場を経験するうちに設計にはない楽しさにも取りつかれている。「工事の最初から最後までを見届けるのが夢だ。

株式会社オカモト・コンストラクション・システム(尼崎市)



中川 福美さん

「計算された線路のカーブの曲線を見ているとわくわくします」

オカモト・コンストラクション・システム建設部管理主任の中川福美さんは、施工管理の仕事に従事した数多くの建設現場の中でも、印象に残っているのが鉄道現場だといふ。

「何より工事現場からしか見ることができない景色が美しい。工事中は、労働災害から多くの人命を守る緊張感があるだけに、完成したときの達成感、解放感は大いさ」

鉄道高架工事を終え、開通時の1番電車に乗った。出産から数カ月で復帰して以降は、内勤の職場に移り、原価管理や品質管理の仕事に取り組んでいる。「図面通りに仕上げることは大切ですが、前後の工程を考え、今やるべきことは何かを明確

建設現場の景色楽しむ

に意識し、より安全に効率的に工事を進めることを念頭に置く」と話す。中川さんはこの仕事を続けてきたがゆえの「職業病」があるという。一つは指を向けて確認する指さし呼称。「家でも子どもたちにも忘れ物がありませんか」といふようにしています。二つ目が3社見積もり。「自宅の外壁塗り替えやエアコンを選ぶときも、相見積もりを取りました。そして三つ目は「通りすがりでどんな工事現場を見ても、安全かどうか気にする。



図面を確認する中川福美さん

近年は建設現場を見ていても、女性の進出が目覚ましいと感じている。「現場作業など確かに力が必要ですが、私も体力には自信がある。男女差はないと思っています。要はこの仕事をどれだけ好きで、どれだけ興味を持てるか。それは男女を問わない」

2人目の子どもが小学校に上がる時期には、また大好きな鉄道工事の現場に戻りたいと思っている。

現場で輝く女性の力

かつては男性ばかりが占めていた道路や河川などの工事現場で、女性の働く姿を目にするようになった。兵庫県内でも民間企業、自治体を問わず、多くの女性が建築・土木の仕事を選び、それぞれの持ち場でやりがいを感じながら働いている。安全で便利な暮らしを支え、豊かな自然環境を守り、地域の発展に欠かせない社会基盤施設をつくる彼女たちの働く現場を訪ね、仕事に懸ける思いを聞いた。

(取材協力=兵庫県建設業育成魅力アップ協議会)

安全・安心で豊かな県土づくり

社会基盤とは、道路、河川・ダム、治山・砂防、港湾・漁港、海岸、下水道・公園、ため池など、安全、快適で便利な生活を送る上で欠かせない施設を指す。兵庫県は、地域の課題やニーズを的確にとらえ、安全・安心で豊かさが実感できる県土づくりを進めるため、整備の基本方針を定めた「ひょうご社会基盤整備基本計画」を2014年3月にまとめた。その実施計画として、県民局ごとに「社会基盤整備プログラム(計画期間=2014~23年)」を6月に策定。厳正な事業評価と公共事業執行の透明性を確保しながら、計画的かつ重点的に整備を進めている。

兵庫県新温泉土木事務所(新温泉町)



都田 通子さん

兵庫県北部の新温泉町を流れる田川で10月上旬、堆積した土砂を取り除く工事の準備が始まった。測量に立ち会うのは兵庫県但馬県民局新温泉土木事務所河川砂防課主任の都田通子さんと職員 榎田ひろこさん。

田川には並野部では珍しく水草のバイカモ(梅花藻)の群落が自生している。工事には、土砂やその上に生えたアシなどの影響で生育不良になったバイカモを守る目的もある。2014年度から近隣住民と、町の職員でつくる「田川バイカモ勉強会」がスタートし、保全方法を協議。そこでの議論が工事にも生かされている。

入庁1年目の榎田さん

「形に残る仕事」に誇り

は「現場で住民と一緒にあって、どうすれば環境を守ることができるのか話し合いながら進めていく過程が勉強になりました」と話す。

榎田さんは大学2年生のとき、佐用町の実家が台風に伴う河川の氾濫で1階の床上浸水の被害に遭った。「こうした被害を少しでも食い止められる仕事に就きたい」と土木系技術者の道を志した。入庁後に自分が目指していた河川砂防の分野で働いていることにやりがいを感じながらも「研修期間中に見学した道路や港湾などの現場を見て市民の生活を便利に、安全にする社会基盤整備のさまざまな仕事を体験



榎田 ひろこさん

してみたい」という気持ちを持ち続けている。先輩技術者として榎田さんを温かく指導する都田さん。入庁14年目で、同事務所は4番目の赴任地になる。

洲本土木事務所時代に

道路を担当したときのこと。バイパス工事を設計段階から担当したことがあった。当初は住民から疑問の声も上がったが、疑問の声も上がっていったが、完成後に「便利になった」とありがとう」という声をかけていただき、この仕事のやりがいを感じました」と振り返る。

現在、兵庫県県土整備

住民との対話を大切に



業者と打ち合わせをする都田通子さん(右)と榎田ひろこさん=兵庫県新温泉町、田川

部には32人の女性土木技術者が勤務している。入庁したころに比べて、女性の土木技術者が増えたことに感慨を覚える。「正しい」と話す。

分が関わったことが形に残る仕事。今後は公園整備の仕事などで、女性の視点も生かしていきたい」と話す。

兵庫県建設業育成魅力アップ協議会 建設業界が将来を担う若年入職者を確保し、若い世代に技術を継承して持続的な発展を図れるよう、兵庫県や建設業者団体などが集まり2014年4月に設置した団体。